



学際的な研究対象であるとともに、さまざまな生の現場で浮上する「マイノリティ」  
本書は、現代の社会・文化の「周縁」とは距離を測り、  
地域研究、言語研究、歴史、社会学、文学研究の  
多岐にわたる分野から、その「周縁」に目を凝らす実践を追求する。

## SDGs時代のマイノリティ

### その経緯と課題

## 「出自」への言及をめぐる補足説明

広島市立大学国際学部

教授 吉田 晴彦

### はじめに

この度は国際学部公開講座2021「現代世界とマイノリティ・多様性——叢書『周縁に目を凝らす』から——」に関心を持って頂き、ありがとうございます。

おかげさまで若い方々を中心に多くの方々にご参加頂き、アンケートを見る限り概ね評判も良かったこと、大変うれしく思います。また、本日(11月27日)、たまたまその講座に参加していたという高校生の方から声を掛けて頂くという思わぬハプニングもあり、非常にありがたく思いました。

### 出自に言及するということ

さて、そんな中、時間の制約から講座の中では触れることのできなかった点について、是非補足説明をさせて頂きたいと思ったポイントがあります。それは講座の中で、8名の著名人の「出自」について、あえて言及した事についての補足説明です。

実は、この件は非常に大切なポイントであると考えます。終了後、たまたま数名の方から、アンケートとは別に感想として「何かモヤモヤとしたものを感じた」と耳にしました。

そのように思われる方がいらっしゃるであろう事、非常によくわかります。といっても、ひょっとしたら若い世代の方々には少し理解しにくいかも知れません。ただ、一定の世代以上の方にとって、そうした印象を受けることは決して珍しいことではないのです。この点は、可能であれば講座の中でも参加者の皆様に考えていただきたかったポイントなのです。

そのようなこともあり、今回はビデオの編集で、その点をテロップとして補足説明させていただくことにしました。また、こうして文章でさらに詳細に説明させていただこうと考えました。

### **出自を明らかにしたくない人々の存在**

まず、今回取り上げた8名の人びとは、いずれも自ら出自を公開している存命中の人々、あるいは出自を公表せざるを得なかった故人ばかりです。出自を自ら明らかにしていない、あるいはする事のなかった方は、一人も取り上げていません。実は、自らの出自を「秘密にしておきたい」という方が、世間には少なからずいらっしゃるからです。

思い出してみてください。たとえば広島の被爆者の中には、自らの被爆を他人に知られたくないと感じていた方が非常に多かったと言うことを。先日お亡くなりになった、広島の被爆者運動のリーダーの一人であった坪井直さんも、若い頃、後のお連れ合いとの結婚を、坪井さんが被爆者であるという理由から許してもらえず、二人で心中を図ったことがあったと言います。

国籍や民族的出自、その他たとえば原発事故後の避難者などが、その出自や属性に関して触れられることに不快感を覚える、というのは、残念ながら今でもある現実の一つです。こうした問題は、個人個人の主観的な問題のようではありませんが、実は客観的な事実として存在するわけです。いわゆる「差別」と呼ばれる問題です。

残念ながら、今でもそうした差別感情を抱く方が、むしろ一定年齢以上の方では多数派である、といえるかもしれません。そして、若い方々の間にも厳然と存在し、たとえばいじめ問題として、様々な不幸な事件につながってたりします。実はこのような主観の問題こそ「アイデンティティ・ポリティクス」として最近注目されている現象に他なりません。

だからこそ、力道山は必死で自分の出自を隠しつつ、張本勲氏に「出自を明かしてはどうか」と言われても激怒して拒否したわけです。しかも、力道山世代の「オールド・カマー」と呼ばれる戦前から日本に定住していた人々は、私が折しも『マイノリティの国際政治学』の担当箇所でも触れているように、国家に出自を振り回される悲哀を味わった犠牲者でした。

### **厳然と存在する出自をめぐる差別**

こうした問題は、たとえば近年でも「ヘイトスピーチ」として現れたり、ブラ

ックライブズマター運動として現れたりすることがあるのは、皆さんもご承知の通りです。場合によっては「民族紛争」といった問題に発展することすらあります。近年でもロヒンギヤの問題が世界的な注目を集めたり、日本でもかつて関東大震災の直後、朝鮮半島出身者や、それと間違えられた日本人たちが、自警団を称する人々に虐殺されたという事件が起こったりしたこともありました。

そうした事実をふまえた上で、少なからぬ人々が出自について言及すること、とくにマイノリティ問題に関しては触れない方が良くと考えるのはなぜなのか、その問題点について、是非考えていただきたい、というのが私の意図するところ  
です。

### 私自身の経験

実は私自身も、かつていわゆる「被差別部落」問題に直面してきた人間の一人です。正確に言えば、私自身の出自ではなく、私の生まれ育った「市」の出身者が、ということになります。

もう20年あまり前の話になりますが、何人もの、心理的にも物理的（距離的）にも本当に近しかった友人たちが、次々と直前になって結婚を破談にされることが相次ぎました。私の隣家に住んでいた幼なじみもそうでした。いわゆる被差別部落問題が、私の住んでいた市（とても小さい市です）に厳然と存在し、それがゆえに、婚約者の親から依頼を受けた興信所（いわゆる「探偵」業）が「その市に住む人々は被差別部落出身者である」と単純化したデマを流してしまったことが原因です。当時法務大臣から人権擁護委員の委嘱を受けていた私自身も、その友人たちのために色々と尽力はしたのですが、結局婚約者の親たちは、そうした話に聞く耳すら持とうとしてくれませんでした。

正確に言えば、私たちの住む町は、たまたまいわゆる被差別部落ではありませんでした。にもかかわらず、同じ市の出身であるという理由だけで、そうした差別を受ける羽目になってしまったのです。そして、実は私たちの町の人々の中にも、被差別部落出身者に対する根強い差別意識があった、ということを経験してきました。それが思わぬ形で私たちの町の人々自身にさえ降りかかってこようとは、当時思いもよらないことでした。

現在ではそうした問題は以前に比べると、随分少なくなってきたようです。しかし、被差別部落のリストを掲載した図書の出版が近年もマスコミを騒がせるなど、今でも特定の地域に限定されがちですが、一定の年代以上の人々には、根強くそうした感覚が残っています。

## デリケートな問題についても話し合える空間の大切さ

かつて、私は以前の職場の同僚から「実際に目の前で黒人を見ると、恐怖感を覚える」と言われ、非常にショックを受けたことがあります。大学の教員ですら、そうした感覚を持っている人が少なからずいるのです。今年も、ある大学の若手教員が、民族差別的発言を繰り返し、マスコミに取り上げられたこともありました。また、公務員の知り合い、特に国家公務員の知り合いにも、民族差別的発想を公言してはばからない方々がいます。

だからこそ、出自について必要以上に言及するのは問題なのではないか、寝た子を起こさない方が良いのでは、触れない方が良いのではないか、という感覚が生じてしまうのは、ある意味自然なことなのかも知れません。

それに対して、あえてそうした出自を公表した人々、あるいはそれを他人によってばらされてしまった人々の思いはどういったものであるのか、逆に寝た子を起こさない、という感覚が何をもたらすのか、とすることに関して、是非これを読んだ皆さんには考えていただきたいのです。

出自だけではありません。先ほど述べた原発事故被災者や、この講座でも取り上げたセクシュアル・ジェンダー・マイノリティなど、いわゆる「マイノリティ」の多くに対し、同じような差別が起こっている、そして場合によってはそれが「死刑」という刑罰につながったり、紛争という悲劇につながったりすることが、現にこの今も世界には存在するのです。

まさにこれも、世界に広く見られる一種の負の「サイレント・マジョリティ」問題と言えるかもしれません。

このような問題について自由に話し合える空間を、ぜひ今後も皆さんと共有できればありがたいな、と思います。

こうした問題に単純な「正解」はありません。しかし、「より望ましい解決」に導く努力をすることは、私たちに必要であり、そして、できることなのではないかなあと考えています。

(2021年11月27日)



写真はいずれも吉田撮影 (2021)